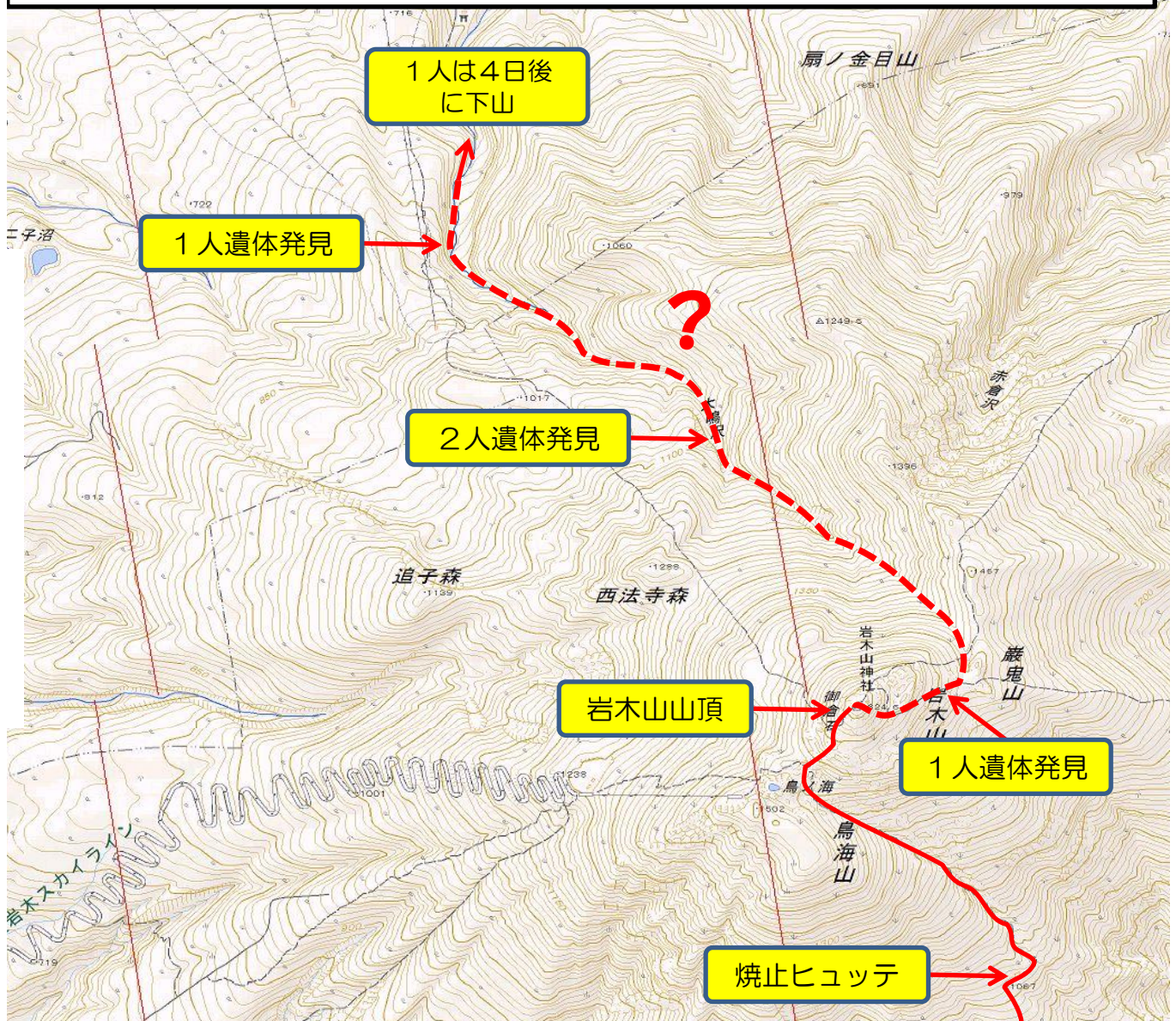


岩木山遭難(1964年1月)

5人の高校生山岳部員は、百沢登山コースを往復する予定であったが、山頂からの下山時に吹雪のため、道に迷い、大鳴沢へ下った。吹雪の中、ツェルトで夜を過ごし、翌日を迎えたが、翌日も吹雪であった。5人のうち4人は次々と命を落としたが、1人は4日後に奇跡の生還を果たした。



解説

昭和39年、東京オリンピックの年。吹雪が同じ道の往復さえも許さない。経験も少ない高校生の遭難。岩木山頂上からの下りで道に迷った。5人のうち2人が頂上へ戻ることを主張。残る2人がそのまま下山を主張。最後のリーダーが下山を決断した。風から避けるように北へ北へと進路をとり、大鳴沢に逃げ込む。コンパスは風で飛ばされ、方向を完全に見失った。次々に力尽き、4人の命が失われた。しかし、たった一人だけ奇跡的に4日後に下山することができた。

ただ1人の生存者は、岩木山での遭難の原因を、夏と冬では山は全く様相を一変させるのを知らなかったことだ、と語った。

「岩木山は、本当に私たちにとってはホームグラウンドだったのに…。考えを甘く持ってははいけません。毎年山で亡くなる人がたくさんいるのに、また次から次へと人々は山に行く。もちろん山の魅力もあるが、誰もが自分だけはそういうことにはならないと思っているからなんですね。でも、何かひとつ歯車が狂うと遭難は起こってしまうものですよ」